

## 「宗教的」交響曲における農民舞曲

### —— ブルックナーのスケルツォ楽章の象徴性について

岡本 雄大 (京都大学)

19世紀のオーストリアで活躍した作曲家アントン・ブルックナー (Anton Bruckner, 1824-1896) は、作曲したすべての交響曲を明確に区別された4つの楽章によって構成した。そのうちのひとつがスケルツォ楽章であり、この楽章は農村での生活を喚起するような世俗的な舞踏様式を特徴としている。本発表は、ブルックナーの交響曲におけるスケルツォ楽章の性格を、19世紀後半のウィーンという歴史的・社会的文脈において考察することで、それが同時代の受容において有していた意味を明らかにするものである。

ブルックナーの交響曲は、「コンサートホールのためのミサ曲」という決まり文句に示されているように宗教的な表現が楽曲全体を支配しており、そのなかにおいてスケルツォ楽章は例外的な存在として受け取られてきた (Nowak 1962, Redlich 1963 ほか)。それゆえその性格は、農民舞曲に対するブルックナーの特別な愛着に由来するものと考えられ、形式的には最終的に解決される性格上の対照を形成するひとつの契機として理解されてきた (Hinrichsen 2016)。

しかしスケルツォ楽章の性格は、19世紀後半のウィーンにおいてブルックナーとその音楽に求められた中世カトリシズムのイメージ連関のなかで統一的に理解できる。当時勢力をのばしていた保守カトリックの人々は中世を志向する傾向が強く、彼らにとって中世以来の素朴な信仰を保ち続ける農民は古き良き時代の象徴であった。ブルックナーがスケルツォ楽章で頻繁に用いる農民舞曲のレントラーは、こうした中世カトリシズムの表象であった。つまり、しばしば指摘されるオーストリアの作曲家によるレントラーの系譜を引き継ぎながらも、18世紀の宮廷における田舎趣味としてのレントラーとは異なる意味を持っていたのである。こうしたレントラー受容のあり方は、同時代人によるブルックナーの評伝 (Göllerich 1922 など) から確認できるほか、マーラーによるブルックナー作品の引用にも見て取ることができる。

そしてそうした農民舞曲風の音楽を交響曲に置き続けたことはブルックナーによる自己演出の一環であった。素朴な「田舎者」としての彼の作曲家像は、周囲が彼に期待していたものであると同時に、作曲家自身によって形成されたものでもあった。ブルックナーは《交響曲第8番》のスケルツォ主題を「ドイツのミヒェル」と呼んだが、それは作曲家自身の性格描写と一致する。実際にブルックナーは典型的な「ドイツのミヒェル」として知られていた。そしてそれは19世紀後半の保守カトリックが理想としていたイメージであったのである。このようなイメージ連関のなかで交響曲全体を捉えるかぎりにおいて、スケルツォ楽章は決して例外的なものではなく、ブルックナーが当時の聴衆に対して提示した自画像として理解できるのである。